

宮川一夫
KAZUO MIYAGAWA

1978年に映画界の同志が映画の発展と映画芸術の向上を目的にスタートした日本アカデミー賞、あれから十年。協会役員の皆さん御苦労さまでした。

ここ十年間に光学系、電子系、磁気系と高度な映像機材の開発が次々と進み、映像表現として新しい映像文化を生み出してきている昨今映画界の若いすべての技術者の皆さんがこの新しい高度な映像技術に対する適応力と能力を持って欲しい、勉強して欲しい。

20世紀を代表する芸術文化である映画を大事に我々映画人で守りたい。

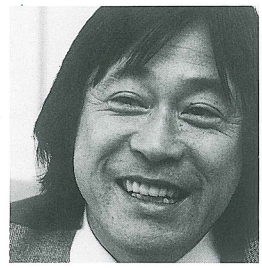


岩下志麻
SHIMA IWASHITA

〝はなれ瞽女おりん〟という映画で、第一回アカデミー賞の主演女優賞を戴いてから、今年でもう十年になるのかと、月日が経つのが早いのに驚いています。その時お祝いに戴いたきれいな時計を今も大切に愛用しています。

ますます映画界も厳しい状況になって来ましたが、前方しか見ずにただひたすら走り続けるしかない俳優にとって、このアカデミー賞は、一年間の区切りとなって、前年度の自分の足跡を冷静に確認するのに絶好の機会です。又、映画に対する熱い想いを自分の中に再確認し、心身を躍動させてくれます。

この十年、映画の観客離れは改善されません。テレビの普及ももちろんですが、経済競争による残業など、色々と原因があるとは知りながらも、映画大好き人間の私としては、やはり、一日も早く、映画産業の隆盛を願わずにはいられません。



武田鉄矢
TETSUYA TAKEDA

映画という仕事を始めてもう十年になる。それまでは唄を歌っていた。唄しか歌えなかった。「幸福の黄色いハンカチ」という映画がぼくに演じる事を教えてくれたのです。しかし、演じることの何という、むずかしさ。生まれて、はじめての映画で、右も左も、いや上、下さえ判らず半分ベソをかいていたあの時。まるで山の子どもが初めて海を見たようなおどろきでした。ぼくはあの時、ただの土くれだったんですねえ。そのただの土くれが人の形になり、眼や鼻なんぞついて動き出したのは「幸福の黄色いハンカチ」のおかげ。

今でも忘れられない、……ぼくは、こっそり新宿の映画館へ「幸福の黄色いハンカチ」を見に行ったのです。ほの暗い映画館のすみで、ぼくはぼくの姿を見た。おどろくなかれ、お客さんが笑うのです。楽しそうに、身体を折って笑ってくれるのです。土くれの人形が笑い声にみがかれて、人間になってゆく。どうやら、その声でぼくは命を与えられたようです。「俳優」という仕事が、むずかしく苦しい仕事でも、とてつもなくみりょくのある仕事だとしみじみ思ったなあ。そして、「しっかりこの道歩けよ」と肩を押してくれたのが、日本アカデミー賞。助演男優賞を貰った瞬間でした。うれしかったなあ、……本とうにうれしかった。

あれから十年。ぼくは、そのセレモニーの司会役で舞台に立っている。とどのつまり、あの瞬間を一番近くで見つめることの出来る役回り。いつまでも、あの瞬間を忘れないために似合わないタキシードを今年も着ます。それが映画に対する情熱を思い出すための特等席のような気がするのです。